

Joan Leach さん招聘 ——第二代会長が果たした宿題——

鈴江 璋子

日本ギヤスケル協会は 1988 年の設立当初は資金も潤沢で、大会・例会には自由に内外から著名な学者を招聘し、講演をお願いすることができた。海外からは A. Pollard、C. Alexander、A. Sanders、A. Shelston という先生方である。協会設立の PR を兼ねての招聘であり、それぞれに奥深い、ギヤスケル研究発展のための示唆に富むご講演を頂いて、素晴らしい成功を得ていたのだが、最後に Joan Leach さんの招聘が宿題として残った。

ジョウン・リーチさんは英国ギヤスケル協会事務局長を長年務め、同協会の母として会員たちに慕われる絶対的な存在であった。大学教授や学者ではないが優れた郷土史家であり、ナッツフォード・ツアーを自分で組んで、ガイドもされるなど、骨身を惜しまず、相手のため、ギヤスケルのために尽くされる方で、著書 *Knutsford: A History* (2007) も準備中だった。なによりも、リーチさんは日本ギヤスケル協会の設立者山脇百合子名誉会長の最大の親友であり、すべてを打ち明けられる相談相手だった。協会の設立についても親身な助言があったようだ。日本ギヤスケル協会としても、本家である英国ギヤスケル協会とは緊密に連携していきたい。山脇名誉会長は早くから招聘を望んでおられたのだが、さまざまな事情があり、ようやく 2006 年の例会にリーチさんを招聘する、と決まった 2005 年秋の役員会で、2006 年 4 月から鈴江が第二代会長をお引き受けする、という羽目に陥ったのだ。だがその時、リーチさんを招聘する費用は、協会には無かった。

多比羅事務局長 = 事業計画委員長の案を容れ、年末のボーナス期を狙って、急遽、寄付金集めが行われた。そして目標額を超える金額が会員の方々から寄せられた。その寄付金をもとに、会員の熱意と協力を頼りにして精一杯のおもてなしをしようと作成したのが、ここに示す案である。当時、メールはあったが、携帯電話はなかった。リーチさんは、いままでに一人旅をしたことがない、海外旅行は初めて、日本語は全く知らないという、ヴィクトリア朝的な 70 代の女性な

ので、いつも誰かが傍に付いているようにして、日本各地を見ていただくというのが立案のポイントである。東郷秀光副会長は文学青年の頃からジョウンの夫君で作家の Christopher Leach と親しく、リーチ家に泊まれたこともあり、大野龍浩先生、松岡光治先生も旧知の間柄だった。だが鈴江を含めたほとんどの会員は、リーチさんにお会いしたことはなかった。

平成18年度日本ギヤスケル協会例会プログラムおよび
講師MRS. JOAN LEACH 歓迎日程 (案)

月	日	時	行事
5	31 (Wed.)	午前8時	Mrs. Leach 成田到着。お出迎え：東郷秀光先生。宿泊：東郷邸
6	1 (Thur.)	一日中 夜	Mrs. Leach 東京近辺の観光・温泉など。お世話役：東郷先生。宿泊：東郷邸
”	2 (Fri.)	朝から夕 方まで 夜	Mrs. Leach 東郷先生に伴われて東京へ。ホテルにチェックイン。東京観光。夕方、招宴会場に連れてきて頂く。山脇先生による招宴（目黒、香港園）宿泊：私学会館アルカディア市谷
”	3 (Sat.) 役員会 例会	朝 12:30 13:00 14:00 14:10 15:20 16:30 16:45 18:00 夜	Mrs. Leach チェックアウト。荷物を実践女子学園事務所に預けて渋谷観光、昼食。2時頃例会会場実践女子学園に連れてきて頂く。お世話役：木村晶子先生と今村京子先生 例会担当役員集合、会場準備 役員会 日本ギヤスケル協会 第18回例会 日時：2006年6月3日（土曜日）午後2時 会場：実践女子学園 渋谷キャンパス「桃夭館」2階プレゼンテーションルーム 開会 総会司会 市川千恵子（釧路公立大学助教授） 開会の辞 日本ギヤスケル協会会長 鈴江璋子 講演 小池滋（東京都立大学名誉教授）『『クランフォード』は落語的ソープオペラ』… 司会 井出弘之（東京都立大学名誉教授） 講演 Mrs. Joan Leach 'Knutsford and Cheshire in Elizabeth Gaskell's Life and Works' … 司会 閑田朋子（日本大学助教授） 閉会 Tea 司会 諸坂成利（日本大学助教授） Mrs. Leach 新幹線で名古屋へ出発。お世話役：松岡光治先生。担当役員は会場後片付け 宿泊：名古屋（松岡邸）
”	4 (Sun.)	昼 夕 夜	Mrs. Leach 徳川園・明治村観光。お世話役：松岡先生。夕方京都へ。ホテルチェックイン。お世話役：玉井史絵先生。夕食をともにして頂き、宿泊代・朝食代等支払いを済ませて頂く。宿泊：新都ホテル（10,375円）

”	5 (Mon.)	昼 夕 夜	Mrs. Leach 京都観光。お世話役：ディケンズ協会の中島彰子先生と大前義幸先生に願います。夕方、松村昌家先生による招宴（玉井先生・中島先生・大前先生）ホテルに連れ帰って頂く。宿泊：新都ホテル
”	6 (Tues.)	朝 11:50 午後	Mrs. Leach ホテルをチェックアウト。シャトルバスで伊丹空港。ANA523 便（10:45 伊丹発）で熊本へ。お世話役：石塚裕子先生。京都から搭乗まで。Mrs. Leach 熊本着。以後お世話役：大野龍浩先生。熊本観光（熊本城、水前寺公園、熊本大学）宿泊：大野邸
”	7 (Wed.)	朝 夜	Mrs. Leach 阿蘇山をドライブ。宿泊：ハイアット・リージェンシー福岡（13,200 円）
”	8 (Thur.)	朝 7:30	Mrs. Leach ANA2142 便で福岡空港発。お見送り：大野先生。成田着（8:15）エールフランス 0279 便で成田発（10:30）Mrs. Leach ヒースロー帰着

万一のことを考えて、例会講師は小池滋先生とリーチさんの二枚看板とさせて頂いた。小池先生は長期にわたる副会長職を終えられたところだったが、快くお引き受け下さった。

さて 2006 年 6 月 3 日、例会当日は暑いくらいの好天で、60 人余りの聴衆が渋谷の実践女子学園桃夭館会場に集まった。小池先生の演題は『『クランフォード』は落語的ソープオペラ』である。司会の井出弘之先生は「落語的ソープオペラか」と疑問詞がついていたのではないかと、疑問を呈されたが、疑問の余地なく「落語的ソープオペラ』であることを論じられ、ギヤスケルにはスコットランドの男性作家が持つ、渋い pawky humour がある、と指摘され「おあとがよろしいようで」と寄席風に結ばれた。

リーチさんはこの朝、精力的に神宮外苑あたりを観光して来たのだが、白い半袖ブラウス姿で登場し、はっきりとした分かりやすい英語で、たくさんのスライドを説明し、ギヤスケルの時代のナッツフォードやチェシャーの自然がどのように都市化されていったかを説明された。スライドは手で操作する旧式のものであり、桃夭館の新しい機械では対応できない。私は前日、大急ぎでそれに対応できる旧式の重い機械を日野の大学図書館から借りた。日野キャンパスから渋谷キャンパスまでタクシーを飛ばせたのは、これが最初で最後である。実践女子大英文学科助手の斉間弓子さんにはビデオ撮影を、熊倉剛子さんにはスライド機械の操作を依頼して、講演もレセプションも、万事順調に進行した。

渋谷キャンパスはとてもうまく作られていて、黒塗りのタクシーは事務棟車寄

せにピッタリと横付けになる。松岡先生にエスコートされたリーチさんが乗り込むと、車はしずしずと車回しを回ってリーチさんの横顔を見せつつ校門を出る。最敬礼でお見送りした私たちは、歓声を上げて、会の成功を喜んだ。

今この案を見ると、なんと人使いの荒いことと自分でも驚いてしまうのだが、とにかくその時その場で助けて下さる方に助けて頂く以外に方法はなかった。京都ではディケンズ協会の先生方にも、ご助力をお願いしている。玉井史絵先生は初対面のリーチさんを京都駅で掴まえられるかと心配なさったのだが、にこやかに降りてこられる姿で、すぐそれと分かったのだった。

リーチさんが一番ひやひやしたのは、新都ホテルから伊丹空港へのシャトルバスが渋滞に巻き込まれ、熊本空港行きの飛行機に間に合うかどうか危ぶまれたときだったそうだ。石塚裕子先生がお世話役を引き受けてバスに同乗して下さっていたのだが、先生もさぞ気を揉まれたことだろう。

無事英国に帰着したリーチさんからは、ご厚情はいつまでも忘れない、会員の皆様、歓迎して下さいました方々によろしく、ことに宿泊させて下さった先生方とご家族によろしくという、心のこもった感謝のメールが来た。その一端をここに紹介しよう。

I so enjoyed visiting you in Japan in 2006, meeting friends and members and will always be grateful to all who welcomed me: Yuriko Yamawaki who encouraged me and planned my visit, those who welcomed me and especially to Hidemitsu Togo, Mitsu Matsuoka, Tat Ohno and their families who took me into their homes and showed me some of your lovely country.

Best wishes from The Gaskell Society
and Joan Leach Hon. Sec

私も英国ギヤスケル協会機関誌 *The Gaskell Society Journal* の 2007 年 9 月号のレポートに、下記のように書いた。

... In spite of a traffic jam, Mrs. Leach succeeded in catching the airplane early

next morning with the assistance of Prof. Ishizuka, to fly to Kumamoto where Prof. Tat Ohno waited to look after her. Prof. Ohno took her around the volcano, Mt. Aso, and the hot springs. As she has been so good to the Gaskell Society of Japan and its members, all the members of GSJ wanted to do something for her to show our gratitude. Thanks to the snapshots the members took, we felt as if we were accompanying her. During her stay, we all were attracted by her cheerful vitality.

その後、日本ギaskell協会は英国ギaskell協会との絆を一層深め、英国ギaskell協会に入会して活躍する会員も増えた。The Gaskell Journal と名を変えた機関誌には日本からの投稿が何本も採用されており、松岡会員は編集委員を務めるとともに <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/Gaskell.html> によって、両協会に多大な貢献を果たしている。閑田朋子会員は副編集長の重責を担っている。

二期4年の会長任期中には『ギaskell全集』の完成祝賀会、協会設立20周年記念事業である『ギaskell全集別巻I, II』の出版、メーリングリストの構築、そしてニューズレターとホームページの整備などさまざまな仕事があり、また置土産になるギaskell生誕200周年記念論文集の準備、ギaskell展の立案など多忙な日々だったが、会員の皆様のご協力を得て、何とか大過なく任期を終えることができた。なかでもリーチさん招聘は初仕事であり、その後訪英のたびにリーチさんや英国ギaskell協会の方々に温かく迎えて頂いたこととも相まって、楽しい思い出になっている。皆様、あのときは随分ご迷惑をおかけいたしました。本当に有難うございました。

(実践女子大学名誉教授)